

STORIA DELLA SARDEGNA



- **I primi uomini** (500.000 A.C. - 10.000 A.C.): manufatti di pietra.
- **La Cultura di Ozieri** (3500-2700 A.C.):
domus de janas (tombe scavate nella roccia), menhir, dolmen, utensili in ossidiana.
- **La Cultura Nuragica** (XVII A.C. - IX A.C.):
I nuragici sono guerrieri e navigatori. Costruiscono 7000 nuraghi (fortezze megalitiche), tombe di giganti e pozzi sacri. Scolpiscono piccole statue in bronzo.
- **I Fenici in Sardegna** (X A.C. - VI A.C.):
I fenici sono mercanti e marinai di origine semitica. Vengono dal Libano e fondano molte città.
- **La conquista Cartaginese** (VI A.C. - III A.C.):
I Cartaginesi conquistano la Sardegna. Introducono dei e tradizioni puniche.
- **La Sardegna romana** (III A. C. - V):
Roma conquista la Sardegna, nonostante la resistenza dei nuragici. I Romani costruiscono strade, teatri, città. E diffondono il latino.
- **I Vandali e i Bizantini** (V - VIII):
Resiste il paganesimo, ma vengono costruite le prime chiese. Prime incursioni dei pirati saraceni.
- **I Giudicati** (IX - XV):
4 regni indipendenti. Nasce la lingua sarda. Codici di leggi.
- **Pisa e Genova** (XI - XIV):
Le repubbliche marinare dominano l'isola. Chiese. Mura e torri a Cagliari.
- **Il periodo Aragonese e Spagnolo** (XIII - XVIII):
4 secoli di oppressione, povertà. Le usanze e le tradizioni spagnole influenzano i sardi. Torri costiere, sistemi difensivi per le città. Chiese.
- **I Savoia** (XVIII - XX):
Dalla Spagna ai Savoia. Moti di ribellione e breve indipendenza.
- **Il Regno d'Italia e la Repubblica Italiana** (XX):
Sviluppo difficile, bombardamenti durante la II Guerra Mondiale. Dal dopoguerra la Sardegna è una Regione Autonoma dello Stato Italiano.

先史時代

【概要】サルデーニャ島は、ヨーロッパの中でも最も古い大陸の一つです。旧石器時代から人々がこの島へ往来するようになりますが、定住生活が始まるのは、新石器時代、紀元前 6000 年頃になってからのことです。この島に最初に暮し始めた人々は、複数の外部の土地から集まってきた人々でした。島の北部とガッルーラ地方に定住していたのは、おそらくイタリア半島、特にエトルリア地方(現在のトスカナ地方が中心)からやってきた人々です。そして島の中央部、カプラス沼やサンタジュスタ沼の周辺には、イベリア半島からバレアレス諸島を越えてやってきた人々、カリアリ湾周辺にはアフリカからやってきた人々が定住していました。

時代と共に、サルデーニャの定住民は言語、服装など文化的な面で統一されていきます。しかし、政治的には種族毎の小国家に分かれており、当時は、種族間で同盟を結び平和に暮していた時期もあれば、争いを行っていた時期もありました。

種族の人々は、それぞれ石を積み上げた円形のわら葺小屋に住み、集落を形成していました。この小屋は現在でも時折この島内で見られる羊飼いの小屋に類似しています。

紀元前 3500 年頃になると、オツィエリ文明というサルデーニャ島全域に広がった文明が発達し、この文明によりサルデーニャ人の習慣は変わり、彼らの感情は新しい方法、それも独特な方法で表現されるようになります。

モチーフの施された壺や彩色された壺など先史時代のものとされるさまざまな考古学的資料が既に発見されていますが、サルデーニャ島ではこのオツィエリ文明以前の資料は見つかっていません。これらの資料は、東地中海(ギリシャ)特有の形をしています。オツィエリ文明の起源は、実際、ギリシャにあるといわれており、島で見つかっている発掘品が、ギリシャで用いられたものと類似していることから、地中海に住んでいた先史時代の人々の交流がいかに頻繁であったかがうかがうことができます。

オツィエリ文明の人々は、石の壁を土台としその上部に木あるいは小枝を利用して立てられた家々で生活し、集落を形成していました。当時の人々が矢先、刃、斧を作るのに用いていた材料は、石、黒曜石、すいせきであり、この時代の人々は巧みにこれらの石を加工する技術を持っていたようです。この時代の洗練された技術を見ると、既に社会組織が存在し、「職業」の初期段階が確立されていたものと推測することができます。

当時の人々は、洗練された物品や装飾を愛好していたらしく、死者を弔うための墓碑にもその様子が伺えます。島のあらゆる地域に残っているこの時代の墓碑は、地下墓碑、巨石墓碑、円形墓碑の 3 つのタイプです。

この時代の墓碑のタイプ

円形墓地(碑)(tombe a circolo)

この「円形」タイプのお墓は、島の限られた地域(サッサリ県アルツァケーナ郊外)でのみ見つかっています。

地下墓碑: ドムス・デ・ヤナス(Domus de janas)



サルデーニャ語でドムス・デ・ヤナスと呼ばれるこの地下墓碑は、1000 以上、島のあらゆる地域で発見されています。岩に人工的に掘られた共同墓碑で、一部屋だけのお墓もあれば、いくつかの部屋がつながっている複合的なお墓もあります。いくつかのドムス・デ・ヤナスの内壁には、オツィエリ文明の人々が岩を彫って彼らの家々や日用品を再現しているのを見ることができます。また、時々、雄牛の頭や角あるいは不可解な円が描かれていることもあり、これらはディオ・パドレ(父神)とデア・マドレ(母神)のシンボル(各々、男性のシンボルと女性のシンボル)を意味しています。

巨石墓碑: ドルメン(Dolmen)



ドルメンと呼ばれる巨石の墓碑は、特に島の北中央部で見つかっています。三個以上の巨石から構成される記念碑的なもので、地面に対して縦方向に置かれた土台となる石の上に平らに石が置かれています。

巨石墓碑: メンヒル(Menhir)



メンヒルは、サルデーニャ語で「ペドラス・フィッタス pedras fittas」と呼ばれ、その意味は「地面に建てられた背の高い巨石」です。このタイプの墓碑は島の各地で見られますが、バルバージャ地方に特に集中しています。メンヒルには、その形状からその墓碑自体が男性のシンボルとみなされ、何も装飾が彫られていないものもありますし、またそれとは別に、オツィエリ文明の人々によって女性のシンボルが彫られているものもあります。

ヌラーゲ時代

【概要】

紀元前 1500 年頃から人々の集落は、「ヌラーゲ」のふもとに形成されるようになります。ヌラーゲとは、円錐形の先端部分を切断した形をした巨石でできた建造物で、部族テリトリーの境界の周囲をよく見渡すことの出来る高台に建てられています。今日、サルデーニャ島にあるヌラーゲは 7000 個以上と言われています。これほど沢山のヌラーゲが見つかっていながらも、この時代の文明「ヌラーゲ文明」は、文書による資料が発見されていないため、未だ謎に包まれたままです。

【宗教】

この時代の文明人達は、紀元前 1500 年から紀元前 900 年頃までの間に、様々なタイプの「**聖域**(santuari)」を作り自然崇拝を行っていました。特に強く根付いていたのは水崇拝で、サルデーニャ島では当時の代表的かつ重要な聖域として**井戸のある聖域**(tempio a pozzo)が見つっています。サルデーニャ島のような乾燥した土地で水は貴重であると考えられて雨水や泉の水を崇拝していたのでしょうか。

「**井戸のある聖域**」は、三つの部分から構成されています。地表部分の入口、地下に下りる階段、そして地下の空間です。階段の下にあるこの地下の空間には、聖なる泉があります。このような聖域がサルデーニャ島では約 40 箇所見つかっています。

一方、水崇拝の他にも先史時代から既に崇拝の対象とされていた**ディオ・パドレとデア・マドレの崇拝**もヌラーゲ文明の人々によって継続されていました。このディオ・パドレとデア・マドレの崇拝に基づいていたのは死者を奉る信仰です。この信仰により「**巨人の墓**」(tombe dei giganti)と呼ばれる記念碑風のお墓をヌラーゲ時代の人々は作っています。

「**巨人の墓**」という名前は、後の時代にこの遺跡を発見した人々が、「このような大きな墓は巨人を埋葬するために作られたとしか考えられない」と信じられていたことから付けられたそうで、実際は記念碑風の共同墓地になっています。このお墓は、正面が半円を描いた形になっており、上空から見ると牛の角のような形をしている岩でできたお墓です。正面中央部には大きな一本石の石碑がありお墓への入口となる穴があいています。ヌラーゲ時代の人々は、この時代で登場したこの新しいタイプのお墓に加え、前の時代のドムス・デ・ヤナスなどのお墓も継続して使用していました。



巨人の墓

【ヌラーゲ時代の遺跡】



ヌラーゲ「ローザ」-オリスターノ県アッパサント



サンタクリスティーナの聖域-オリスターノ県パウラティノ



ヌラーゲ「ス・ヌラージ」にある集落跡-カリアリ県バルミニ



ヌラーゲ「ス・ヌラージ」-カリアリ県バルミニ

フェニキア時代

【概要】ヌラーゲ文明の最盛期、紀元前 10 世紀頃になると、サルデーニャ島には地中海に住むその他の民族が往来するようになります。これらの民族はサルデーニャ島の人々と交流を持ち始め、初めは商業面、やがては政治、軍隊の面においても関係を持ち、そして最初に島へ上陸してきたのがフェニキア人でした。

フェニキア人はどこから来たのでしょうか？フェニキアという国は、地中海東の低地、レバノンの山域と海の間にある不毛な土地に位置していました。この土地は農業には不適でしたが、多くの海岸を有し船が接岸するには便利なところでした。セム人の起源であるこのフェニキア人は、航海と貿易に専念し実にジブラルタル海峡までにも到達しています。その航海の最中、フェニキア人は外国の沿岸地域に上陸し、貿易の重要な拠点となる植民都市をいくつも築いています。こうして、紀元前 1000 年から紀元前 900 年頃、フェニキア人はサルデーニャ島の肥沃な土壌と鉱山に魅力を感じて島の沿岸地域に到達したのです。

島の種族長の許可を受けてフェニキア人達が頻繁に立ち寄っていた島の地域は、カリス(Caralis)、ノーラ(Nora)、ビティア(Bithia)、スルチス(Sulcis)、タッロス(Tharros)、ボーザ(Bosa)、トルレス(Torres)、オルビア(Olbia)と呼ばれ、商業における重要な中心地となりました。そして、内陸に住むヌラーゲ文明の地元民と交易を行い、海上貿易を行なうフェニキア人家族達によって島での生活が営まれるようになり、これらの場所にはいわゆる「町」が形成されます。



タッロス遺跡 - オリスターノ郊外

フェニキア人によってヌラーゲ文明の人々は、ヤシやオリーブの栽培、塩生産技術、漁業について学び、当時の生活条件を更に豊かなものにしました。また、フェニキア人は、島の人々が鉱床を利用する手助けをし、彼らに鉄と金に関する知識を与えました。

フェニキア時代の遺跡としては、ノーラ遺跡やタッロス遺跡などがあります。これらの遺跡は後の古代ローマ時代の人々がフェニキア時代のものをベースに利用したことが分かっていますので純粋な「フェニキア時代の遺跡」とは言えないです。



フェニキア時代の典型的な仮面

カルタゴ時代

【概要】サルデーニャ島は、紀元前 509 年に北アフリカの沿岸地域にあった強力な植民地テュロス(フェニキア人によって築かれた)からやって来たカルタゴ人の手に渡ります。

何故カルタゴ人がやって来たのでしょうか？ある歴史研究家によれば、サルデーニャ島の地元民達は、フェニキア人による島の占領から身を守るために彼らの住む町をしばしば攻撃しており、その攻撃の助っ人としてカルタゴ人の力を借りたことからカルタゴ人が島へ入ってきたのではないかとされています。また別の歴史研究家によれば、カルタゴ人は、サルデーニャ島のフェニキア人を抑圧する目的で自分達の意志によって直接島へ入ってきたのではないかとされています。

紀元前 509 年、カルタゴ人は様々な戦乱を経た後、サルデーニャ人をも打ち負かし、島の山の多い地域(後にバルバージャ地方と呼ばれる地域)を除く全ての地域を手中に収めます。

これまで物々交換で行なわれていた交易は、カルタゴ人の時代になって本格的に通貨を使用するようになりました。

【宗教】フェニキア・カルタゴ人によって、サルデーニャ島には彼らの神々への崇拝が導入されました。ある研究家によると、当時サルデーニャ島ではトフェ(tophet)と呼ばれた聖域で、神に対し子供を生贄にする習慣があったそうです。これには別の意見もあり、別の研究家は、生贄ではなく、死産で生れた子供の骨を神に捧げていたのではないとも言っています。

古代ローマ時代



【概要】紀元前 238 年、カルタゴ人は戦いに負け古代ローマ人がサルデーニャ島を支配します。古代ローマ時代のサルデーニャは、カルタゴ文明に築かれた文化を長期間に渡り継続しつづけます。そして紀元前 227 年、この島は正式に古代ローマ帝国の属州となり、納税義務を科されるようになりました。島の山の多い地域に住んでいた人々(現地ではバルバリチーこと呼ばれる人達)は相変わらず牧羊を行なって生活していましたが、古代ローマ人と島の平野に住む人々の間では緊張感のある生活、あるいは争い事が絶えませんでした。

【サルデーニャ島のローマ化の要素】

- ・古代ローマ人は、奴隷あるいは罪人を使って島の鉱床採掘を開始。
- ・約 7 世紀に渡る古代ローマ支配から、島の人々の気質、言語、衣装など島の文化と土地に大きな影響有り。
- ・新たな町を建設
- ・文化と商業を隈無く発展させるための道路を島内全域に建設
- ・ラテン語を導入。島の内陸部でのラテン語の浸透は遅延。

サルデーニャ島にいた古代ローマ帝国時代の兵士の模型

【宗教】この時代になっても島の内陸部では先史時代から続く自然崇拝が行なわれていました。都市部では、フェニキア・カルタゴ時代の神々への信仰が残りつつもユーノー(光と結婚の女神)やユピテル(天の神)への信仰もいくつかの遺跡から確認されています。



古代ローマ帝国時代の温泉
オリスターノ県フォルドンジャヌス



古代ローマ帝国時代の円形劇場
カリアリ県カリアリ

ヴァンダル・ヴィザンチン時代（キリスト教とアラブの恐怖）

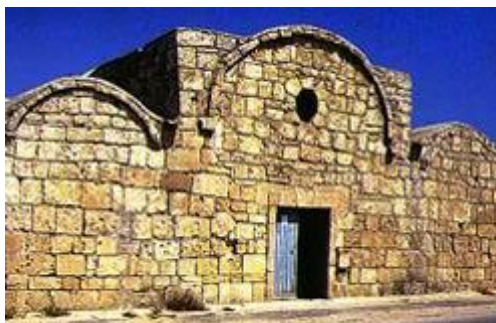
【概要】サルデーニャ島におけるキリスト教信仰は、いつ頃から始まったのかあまり定かになっていないようですが、おそらく古代ローマ帝国からやってきた軍隊や貿易商を介して伝来したものであると言われています。315年から371年の間で特に目立って活動していたサルデーニャの司教は2人おり、エウセビオ司教とルチフェロ司教であり、その後シンマコ司教とイラリオ司教と続きます。

455年、ローマを略奪したアフリカのヴァンダル人はサルデーニャを占領します。彼らは534年まで島を支配しますが、社会・経済面における変化はあまり見られませんでした。この時代の特徴としては、あらゆるカテゴリーの土地所有者に対して税金を徴収していたことと、キリスト教が普及し始めたことです。

534年になると、東方の皇帝ユスティニアヌスはローマ帝国の西側を再度征服しようと試み、ヴァンダル人に戦いを挑みます。皇帝ユスティニアヌスは、この戦いに勝利してヴァンダル人によって支配されていた全領土（サルデーニャ島を含む）がヴィザンチン帝国の一部となりました。ヴィザンチン帝国支配下のサルデーニャ島は平和な時代で、これといった歴史的变化は見られなかったようです。この時代の初期キリスト教教会は、オリスターノ近郊のサン・ジョヴァンニ・ディ・シニス教会とカリアリのサン・サトゥルノ教会で、サルデーニャ島に残っている最も古い教会の代表となっています。

【アラブの恐怖】640年から732年までアラブ人は北アフリカ、スペイン、そしてフランスの一部を占領します。そして827年には、シチリア島をも占領し始め、地中海地域はアラブ人達による発展によって混乱期を迎えます。サルデーニャは、イスラム教徒による攻撃により、ヴィザンチン帝国との経済的・政治的交流が困難になり孤立することになります。特に島の沿岸地域に住んでいた人々は継続的に攻撃され、

奴隷として売られていました。こうして徐々に人口は減少し、より安全な土地を求めて住民は島の内陸部へと移動するようになります。9世紀初頭、アラブ勢の圧力が更にのしかかり、ヴィザンチン帝国によって見放されたサルデーニャ人は、イスラムの脅威に立ち向かうため自立した政治組織を確立しなければならない状況に追いやられます。おそらくこのようにして次の時代、ジュディカート時代が始まったと言われています。



サン・ジョヴァンニ・ディ・シニス教会

オリスターノ県カブラス



サン・サトゥルノ教会

カリアリ県カリアリ

ジュディカート時代

【概要】ヴィザンチン帝国はサルデーニャを捨て(8世紀末)、サルデーニャ人達はアラブの脅威に立ち向かうために独自の組織を設立する必要がありました。そこでヴィザンチン帝国時代に権力を有していた2人の行政官は、異なる4つの地域に居住していた島の行政官4名に彼らの権力を委任してカリアリ(南部)、トゥルス(北西部)、アルボレア(西・中央部)、ガッルーラ(北東部)に四つの独立国を誕生させました。

独立国の支配者はジュディチェと呼ばれ、彼らの領民からは「王」と呼ばれるようになります。ジュディチェには警備が付き、専用の王宮が用意されました。この王宮では、普段の生活を妻、子供そして親戚と共に過ごし、また、行政及び司法の政を行っていました。

【クラトリエと町】

各独立国は、レンヌ(王国)あるいはログ(領地)と呼ばれ、クラトリアと呼ばれる財産管理人によって統治された区域に分割されていました。各クラトリアには、一定数の住民の住む町が形成されました。

【政府と法律】

ジュディチェは女性を含む世襲制に基づいていました。また、ジュディチェ、役職者、人民などによって構成されたコロナ・デ・ログと呼ばれる議会のようなものも存在していました。

【社会階級】

このジュディカート時代の社会は三つの階級に分かれています。役職者、土地所有者、職人、商人がリバリ(自由民)、そして領主に特定の義務のみを負うコツバルティ(自由奴隷民)、セルビ(奴隷)という階級です。セルビといっても労働の面においてであり、個人生活の面においては自由で、苗字を持つ権利や自由に結婚する権利などを有していました。サルデーニャにおける奴隷の位置付けは、ヨーロッパの封建社会における奴隷とかなり異なっていて、島の奴隷は週3~4日間は主のために働き、残りは自分達、自分の家族のために働くことができました。

【経済】

当時の経済は、農業、牧羊、貿易に基礎を置いていました。農作地では、小麦、大麦、ブドウ、ヒヨコマメ、タマネギ、ソラマメの栽培が行なわれます。当時、オリーブは果実を利用するという面においてはあまり普及していなかったらしいです。家畜は放牧で、騎兵用、交通手段用に馬が飼育され、チーズや羊毛の生産のために沢山の羊が飼育されていました。

【修道士】

11世紀頃からローマ教会の要請によりサルデーニャ島に修道士がやって来ます。まず最初にやってきたのはモンテカッシーノのベネディクト修道士で、修道士の活動によってもたらされた経済効果は著しいものでした。彼らの大修道院は、農牧における重要な生産中心地となり、飼育・栽培、作業技術の革新に多に貢献しました。また、修道院は文化の中心となったばかりでなく、島の平原を潤色し豊かにする教会や聖堂の建設を促進しました。当時のこれらの教会のいくつかは、現在でも残っており、中でも、サッサリから数キロのところにあるサンティッシマ・トゥリニタ・ディ・サッカルジャ教会は、ロマネスク様式美術の代表作となっています。



サンティッシマ・トゥリニタ・ディ・サッカルジャ教会

【ピサ人とジェノヴァ人】

島のジュディチエ達と共にアラブ勢と戦い、勝利したピサ人とジェノヴァ人は、これを期にこの島に入ってきます。ピサとジェノヴァの貴族階級から沢山の人が島へ到着し、カリアリには、ヴィスコンティ家、ポーザにはマラスピナ家、イグレシアスにはピサのウゴリーノ伯爵がやって来ました。こうした貴族の到着と、商人やビジネスマンの到着が同時期に起こり、サルデーニャ島全域において貿易が発展します。

【独立国カリアリ、トレス、ガッルーラの最後】

時が経つと共に、これらの独立国の支配者ジュディチエは経済面においても、政治面においてもピサとジェノヴァの影響を更に強く受けるようになり、少しずつ自分達の独立性を失っていきます。最初に外国人の手に落ちていったのは、カリアリ国でした。カリアリ国で城壁に囲まれた新たな町カストゥルム・カリスが近隣の丘の上に誕生します。ここが現在のカリアリのカステッロ地区に相当します。当時の建築物として現在でも城壁、象の塔、サンパンクラツィオ塔、サン・ミケーレ城を見ることができます。



象の塔

カリアリ県カリアリ

数年後に、独立国トッレスが、一部ジェノヴァ人によって落とされ、そして一部独立国アルボレアに併合されます。1296年には独立国ガッルーラもピサ人によってなくなってしまい、こうして 1200 年代の終わりには四つあったサルデーニャの独立国のうち三国が消えてしまいました。アルボレア国だけがその後一世紀以上に渡って存命します。

スペイン植民地時代

【概要】1297年、サルデーニャ島はアラゴン王国の勢力圏の一部となります。エレオノーラ女王による独立国アルボレアのみがこのスペイン勢力に対抗し、一定の期間島全体を管理化に置くことができました。1403年にエレオノーラ女王が亡くなり、サルデーニャの独立国家は終わりを告げ、その後 241 年間に渡りスペイン植民地時代が続きます。

【アラゴンと独立国アルボレア】1297年、教皇ボニファチョ8世がシチリア所有をめぐるアラゴン家とアンジュー家の対立を収める目的で、サルデーニャ・コルシカ王国を建設し、アラゴン国王ジャコモ2世を配属します。こうしてアラゴン国王によってサルデーニャの支配が始まりました。

当時、唯一残っていた独立国アルボレアは、マリアーノ王を引き継いだエレオノーラ女王(*)が支配していました。アルボレア国はアラゴン国に対抗しながら島の支配を拡大しようと格闘を続けます。アルボレア国は、彼女の統治下、対アラゴン国の争いにおいて有効なものであり、カリアリとアルゲーロを除く島の全域を支配下に収めました。



旧アルボレア王国のエレオノーラ女王の像

オリスターノ県オリスターノ

(*)アルポレア国のエレオノーラ女王は、サルデーニャの歴史において最も著名な人物と言えるでしょう。その理由は、彼女が女性であったことに加え、失われた自由の象徴を意味しているところにあります。エレオノーラの名声は、彼女の父親マリアーノの時代からのもので彼女の時代に完成されたカルタ・デ・ログという法典にも関係しています。198 章からなるこの法典は、サルド語の方言ログドレーゼで書かれており、刑法、行政法、国民の義務と権利に関するものでした。この法典は、後になっても 1800 年代前半まで島の法律の参考とされることになります。

1403 年、エレオノーラ女王が亡くなり後の 1409 年にサンルリにてアルポレア軍は、アラゴン国王の息子マルティーノ・ジョヴァネに率いられたアラゴン軍に敗れてしまいます。

【スペインのサルデーニャ】サンルリの戦いで敗れたアルポレア国の最後の試みは、エレオノーラ女王の間接的な後継者であるオリスターノのレオナルド・アラゴン公爵によって行なわれました。しかし、結果は否定的なものに終わり、マコメールの戦い(1478 年)でアラゴン軍に完全に敗北しました。レオナルド・アラゴン公爵はスペイン人の捕虜となりスペインのヴァレンシアにあるヤティヴァ城につながれ、そこで命を落とします。

現在、旧独立国アルポレアの中心地であったオリスターノに当時の城壁跡とマリアーノ 2 世の塔(1291 年)とポルティジェッタ塔が残っています。



マリアーノ塔

オリスターノ県オリスターノ

【アルゲール口、カルロ 5 世とフィリッポ 2 世】アルゲール口の町は 1354 年にアラゴン国の人々によってカタロニアの植民地となりました。今日でもこの地域の人々は、カタラン語に非常によく似た言語を話し、日常生活においてもカタロニアにルーツを持つ面が多く残っています。町には当時の防御塔、城壁、館、ゴシック様式の教会や聖フランチェスコ回廊などにアラゴン・スペインの影響が見られます。1516 年になると、カルロ 5 世の時代です。沿岸に住んでいた人々はこの頃、北アフリカのサラセン人による襲撃に恐怖を抱いていました。この頻繁な襲撃に対し、カルロ 5 世はチュニジアとアルジェの港を攻撃しますが、思わしくない結果で終わっています。そして、1556 年にカルロ 5 世は退位し、スペインは息子フェリペ 2 世の時代となると同時にサルデーニャ島もフェリペ 2 世によって統治されることになります。1600 年代、サルデーニャに 2 つの大きな危機が訪れます。ペストと飢饉です。サルデーニャにペストが入ってきたのはスペインのカタロニアからで、アルゲール口で広まった後、バルバージャ地方とオリアストラ地方を除く島全域へと広がっていきました。1680 年の飢饉では、住民が多く死亡し、島の生産構造が崩され、深刻な経済危機をもたらしました。



アルゲール口の街並み

オーストリア・サヴォイア家時代以降

【オーストリア支配の時代】

1700年のスペイン南北戦争と1713年に調印されたウトレヒト講和条約により、サルデーニャはオーストリアの支配下に置かれました。

【サヴォイア王家支配の時代】

【概要】1718年2月17日、ロンドン会議にて条約が結ばれ、オーストリアはサルデーニャ島の代わりにシチリア島を領土とし、サルデーニャ島はサヴォイア家のヴィットリオ・アメデオ II(Vittorio Amedeo II)の領土となりました。ヴィットリオがサルデーニャ島の国王となり、ここにサルデーニャ王国が誕生します。新しい文化を導入すると農業が新たに発展し、また、スペイン人によって放置されていたカリアリ大学とサッサリ大学も再び活気を取り戻しました。1821年、息子のカルロ・フェリチェ(Carlo Felice)は土地の所有者を明確にする為の法令を制定。1827年には、アルボリアのエレオノーラによって制定されたカルタ・デ・ログに代わる法典が制定されました。また、道路網もこの時代に改善されます。カリアリのイェンネ広場にあるカルロ・フェリチェの像は、古代ローマ時代の道を作り直したカリアリ(Cagliari)からポルト・トッレス(Porto Torres)へと続く道のスタートポイントに立っています。カルロ・アルベルトが王になると、封建制度及び都市国家は廃止され、人民は政府に多額の金額を支払い土地を取り戻します。1847年、サルデーニャ島は自治権を失いピエモンテに属することになり、1861年にはイタリア王国の一部となりました。

【イタリア王国の時代】

イタリア王国の一部となってからサルデーニャにおける産業は著しく発展しました。1871年には、この島に初めて鉄道が敷かれ、スルチスとイングレシエンテスにある採鉱場も完全に操業可能となります。また、日刊新聞もこの時期に初めて発行されるようになります。この時代、ヌオロでは文化芸術活動が盛んになり数々の著名な芸術家を生み出しました。その代表と言えるのがノーベル賞を受賞した作家のグライア・デレダです。

第一次世界大戦ではサッサリ旅団による英雄的行為が島に新たな自信と確信を促し、1921年には Partito Sardo d'Azione という政党が設立されました。戦争の続く中、サルデーニャ島における鉱業は更に発展し、1938年にはカルボニア(カリアリ県)の町が設立されます。このカルボニアの町は、サルデーニャ島の鉱業の中心地となるべき町としてムツソリーニによって作られた町でシチリア州とヴェネト州から労働者として沢山の人が島へ入ってきました。1945年まではカルボニアはムツソリーニと呼ばれていたそうです。ムツソリーニは、その他アルボリアの町作りやオモデオ湖のような人口湖の設立など数多くの業績をこの島に残しました。

1948年2月26日付けでサルデーニャ州はイタリアの自治州となりました。